

埴谷雄高との 対話

——高齡者文学人生論

埴谷雄高 81909-97)

『死霊』(1946-1995)

白川正芳『埴谷雄高との対話』(2006)

白川正芳『埴谷雄高の肖像』(2004)

松本健一『埴谷雄高は最後にこう語った』(1997)

これから先、人間が進化して、何になるか

白川正芳『埴谷雄高との対話』によれば、埴谷雄高の絶筆は、平成九年二月十日、『「死霊」断章』「思いがけぬ芯」末尾の、

生と死と——

あつは、生と死と！

に、エンピツで付け加えた、

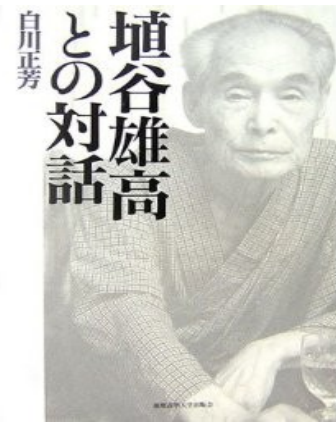
そして、そして………死！

だという。出血性脳梗塞のため、自宅で息をひきとったのは二月十九日。享年八十七歳。

絶筆から絶命までに九日を要している。すこし長すぎるような気もするが、生涯現役の文学者として死んだといってよいと思う。

代表作は『死霊』。生とはなにか、死とはなにかなどの哲学的な問題について考えさせられる難解な小説である。昭和二十一年に「近代文学」への連載を開始し、約半世紀後の平成八年に第九章まで執筆を続けたが、ついに未完でおわった。

いかにも高等遊民の虚無主義者らしい最後だった。その変人ぶりは木村俊介が晩年の埴谷を知る二十七人の作家、評論家、編集者、近所の主婦、お手伝いさんらが語るのをまとめた『変人 埴谷雄高の肖像』である程度わかるが、その思想を知



高と雄との対話

——— 高齡者文学人生論

りたければ、『死霊』をはじめ、『不合理ゆえに吾信ず』『闇の中の黒い馬』などの難解な論文を読まなければならぬ。手引書としては白川正芳『埴谷雄高の肖像』『埴谷雄高との対話』、大岡昇平との対談『二つの同時代史』、松本健一『埴谷雄高は最後にこう語った』等が参考になる。

埴谷雄高は夏目漱石『それから』の代助のような高等遊民がそのまま無事で長生きをしたような人物だ。外へ出て働く人ではなかった。行動する人でもない。ひたすら考える人である。いったい何を考えていたか。

たとえば、「これから先、人類が進化して、何になるか」である。また、「自同律の不快。AがAであることは不快だ。私は私である、といえない」「私がつとめるものは虚体だ」という。

戦前に治安維持法にひっかかって逮捕され、獄中でカントやドストエフスキイを読みふけて、頭がおかしくなり、虚体になってしまった人なのかもしれない。「人間には自分の自由意志で行えることがこの人生で二つある。自殺と子供をつくらぬことだ」とも主張している。

現実に子供をつくっていない。彼の思想を受け入れて、何度も中絶した妻は昭和五十六年に脳血栓で死に、本人は老人性痴呆症ないし老人性饒舌症を自称しながら、やもめ暮らしを続けた。

ふふい 汝自身を知れ あつは